

## 青春の悔恨と学問への道

望田 幸男

---

### はじめに

私は1950年に山梨県立甲府第一高校を卒業し、51年京都大学文学部史学科に入学したので、50年前後といえば、高校生から大学生にかけての時期となる。ところで、この頃の生徒会・自治会活動にはそれなりに関与したが、52年3月以後は、学生運動というよりも学外活動にたずさわっていた。それで本号の特集テーマである「1950年前後の学生運動」を語るうえでは、私はあまり適切なキャストではない。たとえば京大の原爆展や天皇事件などには、外野応援団的な役割はもったものの、現場当事者のなかかわりはなかったし、53年の「荒神橋事件」などは翌日の新聞ではじめて事態を知ったほどであった。このような意味で、ここで語られることは1950年前後の学生運動に関するひとつの「外伝」というべきものだろう。それで、ここでは体験者の語りでもなく、また関係資料にもとづいた歴史的研究でもなく、この時期の学生運動の裾野を形成していた一青少年が、当時の社会・政治・思想の波に洗われながら、どんな思いで、どんな生き方をしたか、その青春の一断章を綴ってみる、ということになる。

### 中学・高校時代——敗戦の余燼ただようなかで

敗戦の1か月前の1945年7月6～7日、故郷の甲府市は大空襲に見舞われた。敗戦のとき、私は旧制甲府中学二年であり、まだ少年の域を脱してはいなかったので、政治的思想的ショックはさほど深刻なものではなかった。しかし生活的にはたいへんな事態であった。わが家は灰燼に帰し、あたり一面は焼け野原と化し、親戚の寺の一隅に仮住まいすることになった。なによりも極度の食糧難におそわれた。しかし、そんななかでも敗戦直後の焼け跡整理に従事させられるかたわら、授業再開とともに知的精神的には渴望をいやされる道が開かれてきた。

青少年期の私にとって、雨宮敏夫先生（理科担当）との出会いが、人生を決定的に方向付けることになった。彼はまだ二十歳代前半の青年教師であったが、私の中学三年のときのクラス担任であった。彼の理科授業は、私の学問への目覚めのきっかけとなった。たとえば彼の理科の授業は、教科書にいっさいもとづかず、古代からの自然科学史の展開を語りながら、理科の基本知識を講じるというユニークなものであった。いわば歴史的発展と論理的発展を関連させながらの説明であった。

それは戦後、脚光を浴び始めた岡邦雄、武谷三男、原光雄などによる新しい科学史研究に依拠し沿うものであった。このなかで私は、学問的眞実のために生きることの大切さを深く刻み込まれた。たとえば、授業ではブルーノやガリレオが、自説の地動説を貫くためにローマ教皇庁と必死で対峙したことが情熱をこめて語られたのであった。

加えて中学の先輩でもあり、雨宮先生の教え子でもあった旧制高校生たち（一高、静岡高校、松本高校など）が帰省してきた折に聞かされたことも、大きな影響を受けた。彼らのなかには左翼思想の持ち主もいたし、西田幾多郎の『善の研究』にこっている者もおり、ドイツ語や英語まじりで語る彼らの「告白」や「アジテーション」は、新鮮な響きをもって耳を傾けさせられた。

私に対する雨宮先生の影響は、学校の内よりも外でのほうがはるかに大きかった。彼は甲府市有数の資産家の次男坊であったので、膨大な蔵書をもち、加えて彼の月給の大半は新刊書の購入にあてられていたようである。私は、それらを一週間に数冊ずつ、彼の書庫から勝手に借り出すことができたのである。その頃の読書メモ帳から著者名だけを抜き出せば、以下のようである。ゲーテ、レッシング、ヘッセ、ハーディ、バルザック、モリエール、ロマン・ロラン、ポアンカレ、トルストイ、オスカワイルド、デカルト、パスカル、デイドロ、マルクス／エンゲルス、内村鑑三、河合榮治郎、三木清、羽仁五郎、武谷三男、坂田昌一、近藤洋逸、出隆、三谷隆正、森有正、尾崎秀実など。まさに乱読そのものであったが、とくにロマン・ロラン、デカルト、パスカル、三木清のものに心酔した。

その雰囲気的一端を伝えれば、私はクラス雑誌『希望』第2号（1946年12月刊）に「デカルト幾何学」、また同誌第3号には「ガリレイ・新科学対話」（1947年4月刊）というタイトルで読書感想文を書いている。また他方で、映画「カサブランカ」（対ナチ抵抗を背景にした恋愛物語）や「王国の鍵」（キリスト教的宗教倫理と法律的刑罰的論理の対峙をテーマ）などを先生といっしょに鑑賞したこともあった。だが、そうしたなかで私の読書傾向は、徐々に羽仁五郎、武谷三男などを通じてマルクス主義的文献をひも解くようになっていった。その背景には、敗戦にともなう思想・社会の変転の大きな流れとともに、甲府の町と学校をつつむ半封建的な雰囲気に対する強い反発があった。当時は学校や親に対して、「封建的だ」と叫びつつ反抗したものだ。こうした反発や反抗の心理に「反封建」＝「近代化」という論理で正当性をあたえるものとして、マルクス主義、とりわけ講座派マルクス主義が「魔力」のように作用した。

反封建的気運の盛り上がりといえば、戦後ほどなく各地で、戦時中、軍国主義的教育の旗振りをやった校長などの追放を要求して、ストライキの波が広がった。甲府中学も例外ではなかった。「校長追放」を叫んで全学ストライキが敢行された。4年生などの上級生の積極分子の主導で、私たち下級生は扇動されるがままについていったのが実情であったが。私などは、空襲で家を焼かれ、勉強する場所も机もなかったので、日曜日でも学校に行き勉強していたものだ。このストライキの日などには、乗り込んできた上級生によって「ストライキ破りだ」と文句をいわれたりした。ちなみにこのストライキによって校長は辞任し、代わって東京から近藤兵庫氏がやってきた。この近藤新校長に、私は卒業するまでならまれ続けることになる。

ともあれ仕立て職人の息子に生まれ、空襲によって家を焼かれ、貧窮のどん底にあった私にとって、雨宮先生は、まさに「文化と思想の世界」という望みがたい高みへの案内者であった。「ひと

はパンのみで生きるに非ず」というが、三度の食事をもとにも取れていなくても、読書に没頭し、折々、「青い議論」に熱を上げる、そんな日々が、いかに生き甲斐に満ちたものであったことか！ そんな折、新制高校二年（旧制甲府中学の新制高校＝甲府第一高校への編成変え）の1948年秋、雨宮先生が肺結核のため療養生活にはいられた。これによって先生との接触はまれになったが、そのことが他方では、雨宮門下の「ひよこ」が、さまざまな思想の「ごった煮」のなかから、いっばしの「マルクス・ボーイ」に巣立っていくきっかけとなった。そうした方向を促進したものとして、甲府に民主主義科学者協会の支部ができたことがあった。この組織は、専門分野別に部会組織を持つ全国的な文化・研究団体であったが、甲府市の場合は、大学の教師・学生、医者、新聞記者などで構成され、主として東京から講師を呼んで講演会活動をおこなった。私は高校生であったので、正式会員ではなかったが、講演会の宣伝・準備などの手伝いをやるようになった。そのなかで羽仁五郎・説子夫妻、松本新八郎、ぬやまひろし、高橋庄治など左派の論客たちの講演に接したのであった。私が『共産党宣言』を読んだのも、高校2年の1948年9月のことだった。

他方でクラブや生徒会の活動にも乗り出した。まず新聞部に所属し、学園新聞に毛沢東思想を中心に中国の新民主主義について解説を書いた。1949年1月の総選挙で、日本共産党が35議席に躍進したのに続いて、10月に中国共産党の主導のもと、中華人民共和国が成立し、この種の問題が注目を浴びていたのである。新聞発刊後に、校長（近藤兵庫氏）から私に呼び出しがかかった。そして「君は共産党員か」と問われた。否定すると、「あの文章は相当の思い入れと勉強をしていないと書けない文章だ」といわれた。実は東大で学生運動をやっていた先輩の話によると、この近藤校長は、戦時中、旧制東京高校の寮の舎監をやっており、左翼学生の追及に一役買っていた人物だそう。その後、しばしば近藤校長からの呼び出しがかかった。たとえば「昨日、ソ連から引揚者たちが甲府駅に到着したが、その際、赤旗を振って迎えた者がいたそうだが、君ではないか」といわれたこともあった。事実無根であった。実は彼は、アメリカ占領軍の出先機関によく出入りし、自分の勤務先をふくむ教育界の左傾分子の追及に熱心であったようだ。朝礼の際に「いまや世界はデモクラシーの時代になった。しかしデモクラシーには二つの流れがある。アメリカのそれとソ連のそれとである。われわれはアメリカのものを選択しなければならぬ」と演説するのが常であった。私たちの高校のなかにも、戦後日本の民主化の風を取って代わって、米ソ冷戦の厳しい風が吹きすさぶようになっていた。アメリカ占領軍の民間情報教育局顧問イールズが、新潟大学で「共産主義教授追放」の講演をおこなったのもこの頃（49年7月19日）のことであった。

生徒会の会長選挙の際にも、こうした事態は反映されていたように思われる。私の立候補演説に対して、「青年共産同盟からの立候補ですか」といった質問が出たり、弁論部から対抗馬が出たりした。当時、全学連の主導のもとに民主主義学生同盟なる組織が全国的に組織され、甲府一高にも波及し、私の精力的な勧誘によって100名ぐらいに膨張していたが、この生徒会会長選挙に前後して、同盟の切り崩しがどこからともなく行われ始め、脱退者が続出し、会長選挙にも落選した。生徒会のなかにも冷戦の風は厳しくなっていた。

こうしたなかで高校卒業の時期となり、恩師ともいうべき雨宮敏夫先生との別れの日を迎えた。ある日、先生のもとに集っていた数名の同級生とともに、お別れの挨拶におもむいた。先生はそれぞれの生徒に選んでおいた本を贈って下さった。私には、波多野精一『キリスト教の起源』を下さ

り、「君は将来、こういう方向に行くだろう」といわれた。当時、私は数学か物理学かの分野に進むことを考えており、『キリスト教の起源』の贈呈には、いささか不満の想いを抱いたが、結局、京都大学史学科に入学し、ドイツ近現代史を専攻することになったことを思うと、私自身よりも先生のほうが、私の性向を的確に見抜いていたように思う。

ともあれ、こうして高校卒業の日を迎えた。好き勝手な読書や活動に明け暮れてきたが、いま想起しても、この時期は生活的には窮迫のどん底におかれていたにもかかわらず、精神的にはまさに「わが青春に悔いなし」の時期であった。だが他方、大学進学には受験勉強の不足のため、一年間の浪人生活を余儀なくされた。

浪人時代（1950年4月～51年3月）の前半は、東京の親戚のもとに寄寓して予備校に通ったが、政治的社会的には日米講和条約をめぐる単独講和か全面講和かの論争とならんで、朝鮮戦争の勃発とともに日本共産党への占領軍司令部による弾圧、いわゆる主流派・国際派への共産党の分裂が、身边に吹きよせてきた風圧であった。だが当時の私は、ともかく一年以上の浪人は絶対に許されない経済環境のなかで、論争を吹きかけてくる友人たちの舌鋒をかわすのに逃げ回っていた。

#### 京都大学宇治分校時代（1951年4月～52年3月）

1951年3月、京都大学文学部史学科受験のため、中学の先輩の友人（京大生）の下宿に数日間、滞在した。食糧事情が悪かったので、米をかついできて、自炊生活を余儀なくされた。毎日、塩こんぶと卵が副食だった。入学試験では英語はかんばしくなく、その他の科目もそこそこだったが、数学は完璧の自信があった。そのためか、ともあれ合格することができた。

当時、京都大学では新制大学発足とともに、一般教養課程を二校地にわけ、二回生は吉田分校（旧三高）、一回生は京都南部の宇治分校に入れられた。そのため自治会は入学したばかりの新入生自らの手で組織しなければならなかった。もちろん、京都市内の吉田分校からは先輩活動家がオルグにやってきた。それに、この当時の京大は、私のような新制高校出がもちろんほとんどであったが、旧制高校からやってきた者もすくなくなかった。だから、全学連中央執行委員の経験者など学生運動の「猛者」もあり、自治会の組織化もスムーズに進んだ。当時の学生の出身が新旧高校の混成であったことは、学生運動のあり方に影響なしとはいえない。それというのも、戦前の旧制高校生・大学生の大正教養主義への憧れがまだ息づいていたからである。前節で述べた大学入学前における私の読書遍歴の跡も、こうした知的雰囲気的一端を物語っていよう。学生運動との関連でいえば、いわば世俗の権力への反発をふくめて「人生、いかに生きるべきか」という精神主義的問いが、学生運動や政治への参加（アンガージュマン）に、まだ通底していた時期なのである。

そしてまた、この時期の京都の学生運動を語る際に、欠落させえないのは、京都という街を包んでいた戦前からの左翼リベラルに傾斜した知的政治風土である。甲府という封建的気風が濃い土地から京都に来た私が、まず驚いたのは、共産党とか左翼思想が大手を振っていることであった。ここには、戦前、滝川事件ののち、中井正一・能勢克男・久野収・新村猛・武谷三男らによる反ファシズム運動（雑誌『世界文化』発行などの運動）があり、その精神は、戦後京都における知識人・文化人のなかに生き続けていた。京大・立命大・同志社大などの教員スタッフに、マルクス主義者

や左翼的学者が目立っていたのもその証左であろう。また政治的には、民主戦線統一会議（略称：民統）の名のもとに、社会党・共産党の連合戦線（内部的には不協和音がくりかえされていたが）が存在していた。1950年には、この「民統」の推薦によって、京都市長に高山義三、府知事に蜷川虎三を当選させていた。また参議院議員には京都地方区から大山郁夫が当選していた。自治会仲間の友人、安井浩君の父は、共産党の著名な市会議員であった。こうした戦前にまで源流をたどりうる「左翼」への好感度が、京都の学生運動の運動空間に底流していたのである。

このような知的政治的風土のうえに、当時の学生運動ないし学生の意識に直接に大きな影響をあたえたのは、朝鮮戦争であった。1950年6月に勃発した朝鮮戦争は、朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国との間に生じたとはいえ、実質はアメリカと中国の軍事的衝突でもあり、日本はアメリカ軍の最前線基地であった。しかも戦線と戦闘は一時期、南端の釜山にまで及び、状況によっては日本本土にも波及するかもしれないと思われた。すくなくとも学生たちのなかには、そうした危機感や切迫感があり、それがこの頃の彼らの意識や行動に影響していた。この当時、印象に残っているのは朝鮮総連系の行動隊ともいうべき祖国国防衛隊がまいたピラの一節である。そこには「自分たちの同胞は、いま朝鮮の山野で血の海のなかで戦っている。われわれ日本において戦っている者たちは、このことを忘れてはならない」と記されていた。

当時の学生運動のスローガンや行動様式を理解するには、同時期のコミンフォルムの動向とか国際的・国内的な革命理論や方針とのかかわりをぬきに語ることはできないだろう。だが、その理論や方針レベルの偏向や逸脱や「ゆがみ」（たとえば共産党第四回全国協議会における軍事方針の決定やその後の火炎瓶闘争、また山村工作隊の活動など）をもふくめて、それらが学生たちに受け入れられたのは、朝鮮戦争をめぐる内外情勢の緊迫感があり、そのなかで平和や民主主義への彼らの気負いや使命感があったからだと思う。後年、つくづく思い知らされたことは、人間は理論に依拠し、理性的に考え行動しているかに思えても、根底から突き動かしているものは、感性や感覚や感情であるということである。とりわけ、こうした感覚が私たちに増幅されたのは、京大宇治分校が旧陸軍の弾薬庫跡に急造され、警察予備隊（朝鮮戦争勃発直後にGHQの命令によって創設、後年の自衛隊）の駐屯地に隣接していたこともあった。二つの隣接施設には壁や柵があったが、そこに「平和を守れ」のスローガン入りのプラカードを掲げたりした。あるとき、この警察予備隊を中心とした京都周辺の「軍事施設地図」ともいうべきものを見せられた時、思わず慄然とした経験がある。戦争と平和の問題、それは当時の学生たちに切迫感をもって迫っていた問題であった。

こんななか、発足したばかりの自治会の支援のもとに、末川博立命館総長を呼んで「平和講演会」がもたれたが、大盛況であった。講演後、「平和を語る会」なる組織の立ち上げを訴えたところ、ただちに百名を超す入会者があった。その後も加入者が続き、大きくなっていく組織を、どのように運営していくか途方に暮れたほどであった。ともあれ、このような「平和への意志」が、学生たちのなかにうねりのように広がりをもっていたことに、正直、驚嘆させられた。

また研究会活動も開始された。のちに日本中世史研究者として著名になった戸田芳実君の主唱で、民主主義科学者協会傘下の歴史研究会がもたれた。当初のメンバーは自治会活動家たちとほぼ重なっていた。テキストは歴史学研究会の大会報告『国家権力の諸段階』であった。あるとき講師に当時、立命館大学専任講師だった岩井忠熊氏を呼んだ。岩井氏が開口一番、「こんなものを大学一年

で読むとは！ 後世おそるべし、それにしてもわかるかいな」とつぶやかれたのが、いまでも印象に残っている。ちなみに、このとき初顔合わせの機会をもてた岩井氏とは、ここ25年間、「非核の政府を求める京都の会」の役員をともに続けている。なお、この研究会は、自治会とも協力して一連の学術講演会を開催した。講師には奈良本辰也氏（日本近代史家）、島恭彦氏（経済学者）など、どちらかといえば講座派系マルクス主義者が招かれていたように思う。

こうした研究会活動と平和運動との結節点ともいうべき活動の一端として忘れられないのは、「軍事研究会」との論争である。この「軍事研究会」は、小室直樹と伊藤皓文の両君だけの研究会であった。彼らは「軍事なき平和論」の虚妄性を唱え、再軍備賛成論の主張者であった。とりわけ小室君は、すごい勉強家で、理学部生であったが、社会科学に関しても該博な知識と独特な論理をもって論争を挑んできた。自治会活動家たちとの激しい論争がキャンパスの一隅でしばしば行われた。しかし自治会側の再軍備反対論者の大半は、小室君の舌鋒にたじたじになっていた。そんななかで宇治分校自治会委員長でもあった高橋哲郎君の論戦は光っていた。彼はまさに「早咲きのマルクス・ボーイ」で、小室君と激しく渡り合った。彼は二年後に同学会（京大全学自治会）の議長に選ばれたが、「名議長」という評判は高かった。小室君は卒業後、大阪大学に再入学し理論経済学を学び、さらにアメリカ留学を経て、東大で丸山真男の門戸をたたき、やがて論壇で大活躍を演じるに至る。伊藤君も卒業後、防衛庁防衛研修所に勤務し、防衛・軍事問題の研究を続けた。彼ら二人はそれぞれ初志を貫いたということであろうか。ともあれ「軍事研究会」との論争は、戦争と平和の問題について運動論だけに終始することなく、理論的な強い刺激を受ける良い機会となった。

さて宇治分校の自治会活動も軌道に乗ってきた51年7月のある日、いかつい風貌をした人物が乗り込んできて、自治会活動家たちをまえにして、「いま京都駅前の丸物百貨店で京大同学会（全学自治会）主催の原爆展をやるかどうかで、全京都の保守と革新の対決が行われている。ここに持参したビラをまいてくれ……」と迫った。後で聞いたら、彼は旧制京大の医学部学生松岡健一氏で、京大病院における看護婦の不当な処遇に対する抗議闘争をやって、放校処分を受けていた。後年、倉敷を拠点に地域医療活動の大黒柱になった人物で、一、二度、「戦争責任」の日独比較に関する講演会の講師に私を呼んでくれるなど、いまでも交流は続いている。ともあれ、こうして京大原爆展の運動に宇治分校自治会もその一端をになうことになった。そして宇治市観光会館を借用して、小規模ながら宇治分校自治会主催の原爆展を開催した。当時は小都市であった宇治市では物珍しさもあったのだろう、おどろくほどの盛況であった。自治会役員たちは懸命に説明係に活躍した。このなかに同級生の梯葉子がいた。後年（1991年）、彼女は夫君川合一良氏（当時、京大医学部学生）とともに「原爆展掘り起こしの会」を結成し、半世紀以上も前の京大原爆展の全貌を掘り起こし伝える活動を始めた。ちなみに、彼女とはいま「非核の会・京都」の役員仲間である。

占領下にあって、かつ朝鮮戦争の渦中にあり、加えてアメリカ大統領トルーマンが「原爆投下もありうる」と発表したこと（50年11月30日）もあるなかで、いわば世界最初の総合原爆展が行われ、2～3万人もの見学者があったことは、世界と日本の非核平和運動において特筆に値するものであろう。なお、この原爆展に関しては、前述の川合一良氏によって『京都保険医新聞』2011年6月20日号以下に7号にわたって、「占領下の『総合原爆展』」と題して詳細な報告がなされている。その後、原爆展は京大同学会や全学連の活動家たちによって、帰郷運動として全国各地でスチ

ール展として開催された。宇治分校における私たちの取り組みも、ささやかながら、その一支流であった。

原爆展について突風のようにやってきたのは、世にいう「京大天皇事件」であった。51年11月12日、昭和天皇の「京大行幸」の際、学生1,000名ほどが、天皇到着前に流された君が代放送に対して、「平和を守れ」の大合唱をもって迎えた。あわせて「天皇に対する公開質問状」も掲げられた。もともと京大同学会は、「歓迎も拒否もしない」という態度を決めており、これといった妨害や騒動でもなく、天皇の視察も無事終了したが、翌日から政府そして国会の議院運営委員会や法務委員会で取り上げられ、「大事件」となっていき、大学当局による同学会の解散や役員8名の無期停学処分が発せられるにいった。

学生側は、「事件」の真相を広く訴える活動に着手した。私たち宇治分校自治会もその一端を担い、学外に出ていった。私も宇治市内のある集会で、大要、こんな意味のことをしゃべったことが記憶にのこっている（学外における演説としては、私の最初の経験であった）。

「日本は朝鮮戦争における前線基地となっている。そのため警察予備隊が創設された。だが、その日本型軍隊の精神的バックボーンはいまだ形成されていない。つまり、なんのために戦い命を賭けるのか、このことが精神的・思想的に確立されていない。そのために天皇制の神聖化がふたたび求められているのだ。京大天皇事件は、京大生たちの平和への素直な心情の吐露にすぎないものだった。だが、その行為は、天皇制による精神的・思想的強化を企図しているものたちにとっては、自分たちの企図に真っ向から対峙しているものと映ったのだ。ここに京大天皇事件の本質がある。」

宇治分校時代の一年間は夢のように過ぎ去った。これといったまとまった知見はえられなかったが、自分なりに真剣に生きた一年であり、後年に至るまで続く交友関係に恵まれた青春の日々であった。

### 学外活動を経て大学復帰まで（1952年4月～56年3月）

一回生も終わろうとした52年3月から、突然、学校を離れ学外活動に専念することになり、その後高校時代に罹った肺結核の再発にも見舞われたこともあって、3年有半の間、いわゆる学生運動とは完全に関係をもたなくなった。その意味で、この後の学生運動を体験にもとづいて語ることは私にはできない。たとえば社会的にも耳目を驚かした荒神橋事件（53年11月11日）も、翌日の新聞で事件の発生を知り、その詳細な経過は、のちに「11.11事件究明教授団」（立命館大学総長末川博、同志社大学学長田畑忍、大阪市立大学学長恒藤恭、京都学芸大学学長山内得立が顧問）によってまとめられた報告書『荒神橋・市警前で警官は何をしたか』で知った。

私の学外活動中における大きな節目は、1955年7月の日本共産党の第六次全国協議会であった。これによって、それまでの極左冒険主義について自己批判がなされ、半非公然活動から公然活動への転換が行われた。それにともない、農村工作隊や都市における半非公然活動など、さまざまな学外活動にたずさわっていた学生たちの多くが学園にもどってくることになった。私もそのひとりであった。ほぼ50年代の前半期に京大生の何人ぐらいが、こうした活動にたずさわったかはわからない。それは「相当数」としか私にはいえないが、この事実、彼らの青春に暗い影を投げかけた。

それというのも、彼らが青春を賭けた活動を支えていた「政治と思想」が、深刻な自己批判の対象となっていたからであり、彼らのなかには「自分たちはなにをやってきたのか」とか「自分たちの青春を返せ」と叫ぶものもあった。そこには学内にあって学生運動を推進した者にも通底する思いが流れていた。こうしたことは、学生運動史としては「外伝的な語り」かもしれないが、1950年代前半期の「学生の歴史」としては欠落させえないものであろう。

こんな意味で、もうしばし自分史的な語りを続けてみたい。大学に復帰した私にとって重くのしかかってきた問題は三つあった。第一は自分の政治や思想にかかわることであった。それは、極左冒険主義的な方針にすくなくとも無批判に従ってきた問題であり、今後ずっと考え続けなければならない課題であり、ある意味で今日に至っても終わりなき「心の旅」の重荷であった。そこには自分が「早咲きのマルクス・ボーイ」であった高校時代からの思考の再吟味があった。その際に出発点というか手掛かりになったのは、丸山真男『現代政治の思想と行動』上・下（未来社、1956、57年）や久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』（岩波新書、1956年）などであった。なお、こうした事情の延長線上に、私のドイツ近現代史研究ならびに研究者としての曲折の道程とたどりついた地点に関しては、拙著『二つの戦後・二つの近代』（ミネルヴァ書房、2009年）を参照されたい。

大学復帰後に重苦しくのしかかってきた第二の問題は、3年有半にわって事実上、放擲してきた学業のおくれを、どう一日も早くとりもどすかであった。2年間ほどは体育をふくめて未修得の単位の山をこなすのに気ぜわしい日々を送った。集会など、どこへ行くにもドイツ語文法書をたずさえて行ったものだ。第三は生活問題であった。勝手に学業を放り出したのだから、ただでさえ経済的に悪戦苦闘している親元の支援をあてにすることはできなかつたので、アルバイトの日々を送らざるをえなかつた。これは、遅れにおくれていた学業のとりもどしをいっそう困難にすることにもなった。

こうした三つの問題は、学外活動や学生運動に専心してきた学生たちに、程度の差こそあれ、ひとしく重苦しく肩にのしかかっていた。それは、1950年代の青春に暗い影を投げかけ、その後の長い人生に悔恨の念を多かれ少なかれ引きずらせることになった。しかし、そうであっても、私をふくめて彼らは生きていかねばならず、そのためには、その暗さと悔恨の念を越えていかねばならなかつた。私が、こうした重苦しきからある意味で抜け出したかのような気分に至ったのは、1958年、大学院修士課程に進学し、おぼろげながらもドイツ近代史研究という将来への方途を意識できてからであった。学外活動から大学に復帰してから3年半後であり、大学入学から数えれば7年後のことであった。

（もちだ・ゆきお 同志社大学名誉教授）